

日本語使用の振り返りを促す「REFLECTION-BOT」の専門家レビュー An Expert Review of "REFLECTION-BOT" which Promotes Reflection on the Use of Japanese

甲斐 晶子^{*1}, 松葉 龍一^{*1}, 合田 美子^{*1}, 和田 卓人^{*2}, 鈴木 克明^{*1}

Akiko KAI^{*1}, Ryuichi MATSUBA^{*1}, Yoshiko GODA^{*1}, Takuto WADA^{*2}, Katsuaki SUZUKI^{*1}

^{*1}熊本大学教授システム学研究センター

^{*2}タワーズ・クエスト

^{*1}Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

^{*2}Towers Quest Inc.

Email: akai@kumamoto-u.ac.jp

あらまし：「REFLECTION-BOT」は、留学生が日常生活における日本語使用についての気づきをコミュニケーション・アプリ「LINE」を用いて継続的に記録するための疑似対話型入力システムである。本 BOT を用いた実践について、実施した教員に概要と所感についてのインタビューを実施した結果、筆者らが意図した用途での有効性が予期され、同時に実用化に向けた改善点も明らかになった。

キーワード：日本語教育、リフレクション、言語接触場面、学習者オートノミー

1. はじめに

「REFLECTION-BOT」⁽¹⁾は、留学生が日本語使用についての気づきをコミュニケーション・アプリ「LINE」を用いて継続的に記録するための疑似対話型入力システムである。日常生活における日本語使用頻度や遭遇した状況・場面とそこでの自身の対処等を記録し内省することで、次の学習目標設定へつなぐ意図で設計された。教員による質問・対話での促しと日誌形式による記録手法の双方の利点を折衷的に取り入れており、低次段階の振り返り活動への寄与が期待できる。

本報告は上述の設計意図に同意を示した協力教員が、大学の初年次教育科目において一学期間にわたり本 BOT を授業に取り入れた際の事後インタビュー結果を簡潔にまとめた速報である。

2. 「REFLECTION-BOT」の概要

開発したシステムは、LINE 上で動作するいわゆる「BOT」と呼ばれる自動発言機能である。ユーザーは管理者ごとに発行される QR コードを用い、LINE 内に本 BOT を架空の「友だち」として登録できる。その「友だち」が個々の出来事について一連の問いかけを行い、それに対するユーザーからの返信が記録される。入力された情報は管理者ごとに発行される参照用 URL を用いて csv 形式でダウンロードでき、一覧できる。また、外部 e ポートフォリオサービスに連携するための出力形式にも対応可能である。

本 BOT は留学生にとって身近で慣れたコミュニケーション・アプリである「LINE」を用いた点、Push 型の通知機能で入力を促す点、対話型インタフェースである点、短い質問に短く回答する形式である点に特徴がある。学習日誌に替わるものとして学習者の自律性を尊重し能動的な記入を期待する姿勢は保持しつつも、記入忘れ防止用の通知機能を有する。その通知時刻は学習者が決められ、それにより学習者にとって都合が良い時間帯に記入を促せること、また自己決定することで、より自分ごととして捉え

ることから、記録やその後の行動変容を起こしやすくなると期待されている。

本 BOT は、特に大学初年次教育における必修日本語科目のような、日本語運用能力の強化のみならず学習目標の設定等の自律学習態度の養成が期待される授業において、その活動支援を意図し設計した。教員が学生の記録を見ながら定期的にリフレクションを深めるための介入を行っていくことを想定している。例えば、記録のうち特に印象に残ったものを問い、なぜ印象に残ったか、何が問題だったか、これまでも同様の問題が無かったか、次の課題は何か等のより高次の問いかけをしていく。こうすることで、学習者の行動の意味づけや学習目標の方向性の再検討をすることが考えられる。また、留学生同士でそれらの気づきを共有し相互コメントをする等して他の留学生の日本語使用状況や日本語学習への取り組み方について知り、それを自己の学びに反映させることができるようになる。

3. 授業での実践概要

某私立大学では留学生向け初年次日本語必修科目を3種類提供している。そのうちの1科目を担当する教員全員(全3名、うち1名は筆頭筆者)が本 BOT を用いた活動の実施を決め準備した。授業開始前、担当教師全員で打ち合わせを重ね、以前の筆頭筆者による実践結果を共有した。改めてより書きやすく、より行動変容につながる質問項目を検討した結果、当初の設計時に設定した質問群から以下の5問へと変更し、そのようにシステムを修正した。

- (1) 今日、日本語はどれくらい使ったかな？
1～5でどのくらい？
- (2) その中で、一番覚えていることを教えて。
- (3) なんでそれを覚えているの？
- (4) そのことについて、今、どう思ってる？
- (5) じゃあ、これからどうする？

また、共通科目としての統一事項として、初回の授業で日本語の気づきを記録することについてオリ

エンターションを行った後、週に一度の授業に合わせ、日本語学習あるいは日本語そのものについて、気づいたことをメモしておくよう指示すること、記録ツールの選択肢の一つとして本 BOT を紹介することを定め、必要な資料準備を分担した。その後の授業内活動については各教員の裁量とした。

4. 協力教員へのインタビュー

対象と目的

実際に新入生が履修登録した2クラスを対象とし、筆者が関わっていないクラスを担当した教員1名（以降、教員Aと呼ぶ）に、学期終了後に非構造化インタビューを行った結果を報告する。教員Aは日本語教育分野で約20年の教授歴を有し、自律学習支援の経験も豊富な熟達者である。授業内での活動実態および教員の直感的洞察を尋ね、本BOTの有効性や改善の方向を探ることを目的として実施した。

聞き取り結果

教員Aが担当したクラスの履修者は約10名であった（学生の特定を避けるため詳細の数字は伏せる）。初回の説明時には履修者の100%が本BOTでの記録を選んだ。しかし、求められた回数を入力を最後まで継続できた学生は約20%で、週に一度であれば記録したという学生を含めると約37%だった。当該クラスは新入生50%と再履修生50%で構成され、特に再履修生のうち50%は初回以外でほとんど記録がされなかった。継続的に記録した学生が少なかった点については、質問項目の不適合とモチベーションの問題であろうとの指摘があった。

教員Aは初めのうちはBOTの項目通りに記録するよう学生に求めたが、実際に気づきを書いた学生は多くみられず、大半が授業で聞きかじったり分からなかったりした言葉やアルバイトで知った俗語など、単語レベルの記録であった。それにより、質問項目(4),(5)への回答がしにくそうに感じられた。そのため、質問項目(5)のように行動変容の意向について尋ねても、「覚える」「勉強する」等の浅い記述しか見られず、徐々に学生に対し個別の介入を始めた。例えば、アルバイトに関する言葉が度々記録されていた学生には、翌週までにアルバイトに関連する言葉を集めるという課題、キャビンアテンダントを目指す学生にはバイト先で接客用語を探す課題等、学生のニーズや興味によって異なる課題を与え、質問項目(4),(5)への回答の代わりに入力するよう指示した。教員Aは学生らが入力する内容が大きく「気づき」「語彙」「精神面」の3タイプに分類されるとしたうえで、「気づき」以外を入力した学生にとっては現行の質問項目群では特に(4),(5)が答えにくくなる点を指摘した。また、記入内容が上記3タイプのいずれかによって、その後の質問項目を変える機能を提案した。

教員Aは学期末に学生による自己評価を実施しており、記録しなかった理由についても尋ねていた。

そこでは、母語が文字化けした等の操作面での混乱だと説明する記述も見られたが、肌で感じた印象では単に面倒そうな様子だったと述べている。教員Aはそれよりも、学生が記録後すぐにフィードバックを欲している様子が観察されたことを重視しており、実際に自己評価でもそのように記述した学生がいたことを紹介した。その解決策として、学生が記録をした際に教員がPush型での通知を受け取れると良いと語った。現行のシステムは管理画面にログインしないと記録の有無が確認できない。当然、四六時中の返信を約束するのは現実的ではないとした上で、それでも通知があれば利便性が向上すると述べた。

本BOTの可能性については、自律学習支援の良いツールになりそうだと回答した。単なる語彙収集であればBOTではなく紙のノートの方が一覧性において優れている。それよりも、初めは単語レベルの記録であっても、現状で最も多い言語使用場面がどこかを認識させたり、ある表現がどのような場面で使えそうかを考えさせたりしすることで、言語使用場面を拡大していくよう教師が誘導していくことが重要であると強調した。

5. まとめ

本BOTはオートノミー促進の支援として、学習者が自身と対象言語との関わりを意識化し、具体的な目標設定に結びつけることを意図し、設計したものであるが、今回のインタビュー結果から、自律学習支援および日本語教育の熟達者である教員Aからも本BOTの有効性が予期される回答が得られた。

一方で、システムとしては管理者側の通知機能および一律な質問項目の不自由さについて改善点が挙げられた。特に、答えにくさや分岐については、学生に対して行った評価実験⁽¹⁾での結果と一致する。単なる語彙の記録にとどまる学生が多かったことも同様の結果であった。語彙の記録は本来の活動意図とは異なるが、実際には気づきが無く、見聞きした言葉を記録することしかできない学生が多いことが予期される。教員が学生に寄り添いその時点から出発し誘導していけるよう、質問項目を編集できる機能は追加が必要であろう。分岐については、設定が複雑になることにより敬遠する教員が出る可能性もある。さらなる検討が必要である。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 16K21342 および 20H04297 の助成を受けました。また、実践に賛同し、調査を快諾して下さった先生方に深く謝意を表します。

参考文献

- (1) 甲斐晶子,松葉龍一,合田美子,和田卓人,鈴木克明: “日本語使用に関する低次段階のリフレクション記録システム「REFLECTION-BOT」の設計と実装”,教育システム情報学会誌, 37(4) (2020 印刷中)